

●テキスト **金相泰** 『ある被抑圧者の手記』(新地平社、1986年8月)

第V部 座談会「(金相泰、山岡強一、朴哲錫、風間竜次) pp.171-203

『抗日パルチザン参加者たちの回想記』を読み、朝鮮人民の革命闘争を学んできた私たちは今回、金相泰の『ある被抑圧者の手記』をテキストに選びました。

「この手記は、祖国をもたない無国籍のプロレタリアで、抑圧と差別の社会で生きてきた一人の在日朝鮮人の、生存を立証する過去帳である」(本書「はじめに」より)。本書のうち、とくに金が日雇い労働運動活動家らと語り合った第V部の座談会(171~203頁)を中心に読みます。

日時 **3月9日**  
(日) 午後1時15分~4時半

場所 **赤羽北区民センター**  
(赤羽北ふれあい館) **第1和室**  
(アクトピア北赤羽六号館3階)  
JR埼京線北赤羽駅赤羽口から徒歩1分  
東京都北区赤羽2-25-8



13:30~14:30 報告 **須田光照** (労働組合専従)  
14:45~16:30 討議

参加費 **ひとり500円** (要予約)

主催(予約) **前田年昭** tmaeda1966516@gmail.com 電話 080-5075-6869

- 参加希望の方は事前にお申し込みください(電話・メール)。当日は報告者の問題提起と、感想や意見の交流、討議を行います。
- あらかじめ対象テキストを読んできてください。なお、今回のテキストは絶版本なので入手できない場合はご連絡ください。

在日朝鮮人だった金は戦前・戦後を通じて日本の地で「朝鮮解放と日本革命は一体のものである」という立場で闘いました。その半生をみずから記録した本書を読むと、日本と朝鮮の下層労働者人民がかつて隊伍を組んで「共通の敵」=日本帝国主義と闘っていた歴史が、限られた時代と規模とはいえ、確かに存在していたことがわかります。

その日朝共同闘争を率いたはずの日本共産党が現在は金たちの闘いを「正史」から抹消してしまっている中で、「あれは朝鮮人活動家が日本革命のために利用されたのだ」という見方があたかも定説のようにまかり通っています。しかし、当事者だった金は本書の座談会の中で、そのような見方を「朝鮮人が利用されたということになれば、私は何のために生きて来たのかかわらなくなってしまう」と断固否定します。

労働者人民の国際主義とはどうあるべきなのか。さまざまな矛盾や誤りを含んだ過去であったとしても、すべてをなかったことにする清算主義では次代に教訓を残すことができません。「万国の労働者と被抑圧民族は団結せよ！」(1920年のコミンテルン第2回大会スローガン)は、世界中で排外主義が吹き荒れている今を生きる私たちへの変らぬ呼びかけであり課題ではないでしょうか。金の貴重な証言を読み、歴史から何を継承し何を克服するべきかをともに考え、話し合しましょう。(文責・須田光照)

**金相泰 略歴**

- 1907 慶尚南道晋州市井村面で出生
- 1919 3・1独立闘争でデモに参加。普通小学校入学
- 1923 天道教少年会入会、「読書サークル」をつくる
- 1927 全羅北道・高敞高等普通学校反日ストライキ組織、退学処分受く。逮捕され全州へ移送(出版法違反)
- 1928 全州地裁判決(懲役6か月、執行猶予2年)。渡日
- 1930 武装メーデーに参加
- 1931 国際反失業デー大会、検束される。共産主義青年同盟北部地区キャップ・日本共産党東京城北ビューロー地区責任者に。全協・土建支部結成大会。共青・地下鉄細胞を組織
- 1932 全協・地下鉄スト勝利、逮捕
- 1934 東京地裁判決(懲役3年数か月)、博多刑務所下獄
- 1945 日帝敗戦、朝鮮解放
- 1946 日本共産党再入党、金町居住細胞長。『かつしか民報』発刊
- 1949 日本共産党東京都委機関紙部事務局員
- 1951 民商『民主商工』発行責任者、党関東地方委「軍事委員会」テク活動を行う。柴又事件に関連し査問を受ける
- 1953 金町細胞に復帰
- 1955 朝鮮人党員の離党通達後も細胞に残るが、後日自然離党

※巻末の略歴には、以後の経歴について記述がないが、晩年、日雇全協の活動家との交流が続いていた。

『翻訳と連帯 ある寄せ場労働者の「抗日パルチザン参加者たちの回想記」翻訳の軌跡』

(編訳・鈴木武、発行・同志社コリア研究センター、2023年3月17日、非売品、A5判328ページ)

※本書は『回想記』全264話から精選した28話で、電子版が発行元の同志社コリア研究センターのウェブサイト <https://do-cks.net/works/publication/korea05/> で読めます。QRコードは⇒  
264話全訳データは <https://fire.st/h6yq1ut> にあります。



敵の包囲の中で闘う(つづい)

リムガン県エチャグ戦闘(第2巻第11話)

岡崎耕史

報告で取り上げた「リムガン県エチャグ戦闘」は、朴成哲による1938年秋のバルチザン包囲突破戦を回想したものである。1956年第3回大会以降に書かれたものと考えられる。

報告では、記述の輪郭とその脈絡について主に調べたが、読書会参加者からは、上記のような物語の内実についての指摘が相次いだ。

選ばとられた青少年。バルチザンという主体

革命のつぼみたち(第4巻第29話)、革命の暴風雨の中で育ち、勇敢に闘った児童団員たち(第11巻第16話)

キム・ヨンイル

この時点までの政治的な生きざまに留まらず、朝鮮の政治的困難の克服の連続と重なり合い、突破することが最も困難で不可能な包囲的狀況下での決断と勇氣、それが切り拓き次へと繋がっていくことの美しさ、感動を端的に指し示している。

第7回では、『革命のつぼみたち』『革命の暴風雨の中で育ち、勇敢に闘った児童団員たち』を取り上げた。ともに児童団——青少年バルチザンの闘いを描く。セナル少年同盟、反帝青年同盟、朝鮮共産主義青年同盟、少年先鋒隊、少年探検隊：革命の未来を見通して革命的青少年団体が組織された。遊撃根拠地や解放地区では児童団学校が建設され、一般知識と軍事知識を教練した。児童団の任務は偵察や通信連絡、ピラ工作など情報活動を中心とする。子ども同士の遊びを装うなど創意と機転で日帝を

出し抜く一方、弾圧は容赦ない。通信メモの搜索は農作物の中までおよび、摘発されれば懐柔と拷問の末に虐殺される。だが、日帝の蛮行を身をもって経験している児童団員たちは屈服せず、絶対に機密を自白しない。

子どもと戦争を主題としたものは枚挙に暇がないが、子どもを主体的な抵抗者として描いたものはそう多くなく、そういった意味でも回想記の「革命のつぼみたち」シリーズは貴重な記録だ。また、今回これらを選んだのは、この間のパレスチナ戦争と重ねざるを得ないからだ。

「おんな、子ども」はもっぱら非戦闘員の被害者なのか。抵抗の主体であることを捨象するのはブルジョア思想そのものではないのか。読書会では、「おんな、子ども」にはそれぞれの固有性があり一緒くたにすべきではない、という批判があったが全くその通りである。一方で、「この時の児童団員の歳から言えば、普通分別がなく、いらざらにばかり熱中する年頃(43ページ)」であるのは確かで、特に乳幼児期においては養育者と親密な関係を育むことによつて安定した人格形成がなされる。逆境は人を成長させるが、実存を傷つけもする。主体性にも発展段階を想定すべきではないか、発展途上における主体性の強要は有害であるという意見には深く考えさせられた。

侵略者への抵抗から生まれた民衆運動は、その過程で来たるべき秩序を構想し、構成する。青少年バルチザンも、当然その戦列の一つであるはずだ。

それはまた、どのような絶望的な状況にあつても決して敵に屈しない集団的な信念、行動をもつて人民に込めるべき信念、——そして、人民の希望を一点に集約しつつ応えようとする金日成への忠誠に込める喜びを媒介にして——のみが達しうるのだということを示している。

子どもと戦争を主題としたものは枚挙に暇がないが、子どもを主体的な抵抗者として描いたものはそう多くなく、そういった意味でも回想記の「革命のつぼみたち」シリーズは貴重な記録だ。また、今回これらを選んだのは、この間のパレスチナ戦争と重ねざるを得ないからだ。

子どもと戦争を主題としたものは枚挙に暇がないが、子どもを主体的な抵抗者として描いたものはそう多くなく、そういった意味でも回想記の「革命のつぼみたち」シリーズは貴重な記録だ。また、今回これらを選んだのは、この間のパレスチナ戦争と重ねざるを得ないからだ。

子どもと戦争を主題としたものは枚挙に暇がないが、子どもを主体的な抵抗者として描いたものはそう多くなく、そういった意味でも回想記の「革命のつぼみたち」シリーズは貴重な記録だ。また、今回これらを選んだのは、この間のパレスチナ戦争と重ねざるを得ないからだ。

軍事、警察的、天皇制権力によつて強行された強盗侵略戦争は、数百万の人民の生命を奪ひ去り、一千万人に及ぶ罹災者と無数の不具者を作つた。史上未曾有の窮乏と飢餓と失業とがわが日本の労働者、農民及び一切の勤労大衆を襲ひつゝある。我が日本共産党は天皇制権力の犯罪的帝国主義戦争に対して過去廿四年に亘り全面的に抗争し來つた。其の故にこそ野獸の如き強権の鞭によるあらゆる迫害にさらされ、多くの党活動家は、十余年に亘つて人権蹂躪の牙城たる牢獄裡に呻吟せしめられた。しかし乍ら、遂にこの野蕃極まる軍事的、警察的帝国主義権力の崩壊の日は始まつた。「中略」飢餓と窮乏と家なき惨状は、かゝる天皇制官僚の帝国主義政府及び彼等の代理人たる天皇主義御用政党によつては、絶対に改善され得るものではない。戦争犯罪の元兇たる天皇制打倒による軍事的、警察的帝国主義の根本的掃蕩と世界平和の確立こそ日本民衆の解放と民々主義的自由獲得の基本的前提である。我が日本共産党が掲げる左記の実践的要求こそ日本民衆を鞭と搾取と牢獄の天皇制支配を終滅せしめ、労働者農民その他一切の勤労大衆を自由の分野に解放するための指標となるものである。

一、天皇制の打倒、人民共和政府の樹立  
二、ポツダム宣言の厳正実施、民主主義諸国の平和政策の支持。朝鮮の完全な独立。労働組合の国際的提携  
三、一切の反民主主義団体の解散と反動地下組織、及び白テロ、テロ計画の根絶、一切の戦争犯罪人並びに人権蹂躪犯罪人の厳正処罰。民主主義の敵たる天皇主義御用政党の排撃  
四、天下り憲法廃止と人民による民主憲法の設定。樞密院・貴族院・衆議院の廃止と民主的一院制議會の設定。華族その他一切の半封建的特權制度の撤廃  
五、警察の横暴による一切の犠牲者、一切の政治犯人の即時完全釈放及び完全なる復権と救援。官憲による一切の被害者に対する損害賠償の要求  
六、一切の人民抑圧法令、及び刑法中の「皇室に対する罪」の完全なる撤廃。大衆運動取締反対。人種・民族・国籍による差別待遇反対。一切の身分的差別の撤廃(後略)

〔資料〕日本共産党第4回大会行動綱領(1945年12月1日採択)

※傍線部は大会での修正補足部分